布告

『今日の部活、超重要連絡あり！　絶対急いで来ること！』
深夜０時に、とてもそうとは思えない興奮気味なメッセージを送ってきたのは青原梨沙だった。
織山凪はそれを見て(つい先日まで熱にうなされていた人間が起きていていい時間じゃないだろう、と思いつつ)そのメッセージに返信する。
『超重要連絡？』
すぐ既読がついた。
『そう。超重要連絡』
どうだろう、と凪は思った。話を盛るとまでは言わないが、彼女はリアクションがオーバーな時がある。というか、悲しいことに校内で注目されていないどころか知名度すら高いとはいえない我が部に、そこまで重要な話なんかあるだろうか。
『本当だから！　でも今ここでは話せないから、本当に早く来てね。じゃあおやすみ』
凪が疑っているのを察したかのようにメッセージが追加される。困惑している間に本当に青原はさっさと眠ってしまったらしい。凪が親指を突き立てたウサギのスタンプを送る頃には、もう既読がつかなくなっていた。

凪の所属している演劇部は、大体十六時に始まり十九時ごろに終わる。本当は十九時にはもう片付けまで済ませていないといけないのだが、なんだかんだ全員熱中してしまうので、それはほとんど守られたことがない。
チャイムが鳴って、ホームルームが終わる。
時間を教室の壁掛け時計で確認すると、十五時半を過ぎたところだった。普段から部活がある日はかなり早めに部室についているつもりだが、わざわざ連絡が来たくらいだからな。
凪はそそくさと教室を出て、少し早めに歩いた。
凪たち部員が部室、と呼んでいる普段の活動場所は、別棟三階にある小さな教室である。そもそも別棟は美術などその授業の時にしか使われない教室ばかりで、ホームルームなどが行われないため基本的に人がいない。その上薄暗く、エアコンの効きが異常に悪いので、どこの部活も使おうとしない。そこに、本棟での部室争いで大敗を喫した演劇部が目をつけた。
階段を降りて、みっつ先の教室(といっても、場所は足りないし他に誰も来ないから周辺の教室も使う)。鍵はかかっていなかったけれど、まだ誰もいなかった。
「寒っ」
あまりの寒さに震えながら、暖房をつける。忘れていたけど、一月の平均気温は十度を回らない。カイロを持ってくるべきだったかもしれない。
なるべく広いスペースがあった方がいいから、体を温める目的も兼ねて、合わせて二十もない机と椅子を教室の外に運ぶ。
まだ十分ほど時間があったので、窓際に寄りかかって青原から送られてきていた資料を読むことにする。持ってきていたタブレットを起動させた。年末に練っていた予定通りなら、脚本の八割はできているはずなのだが、まだ大体の構成がメモされているにとどまっている。理由は言うまでもなく彼女の体調不良だろう。
資料を見ると、かなりぎっちりと情報が詰め込まれていた。キャラクターの設定、舞台となる場所やプロットの詳細、必要なものや一番書きたいこと。たぶん体調不良の中色々と書いたんだろう。思い描いた景色を一秒でも早く文字に起こしたい、という情熱がひしひしと伝わってくる。
さてどうしようか、と凪が電子ペンを持ち直したその時、ぎいいい……と音を立てて教室のドアが開いた。

「あれ、もう来てたんだ！」
教室に入ってきてそう声をかけてきたのは、青原梨沙だった。相変わらず声量が大きいが、今日はマスクをつけているし心なしか普段より若干元気がない。凪はそう推測した後、すぐに資料に意識を戻した。
「そっちが早く来いって言ったから」
「あ、織山くんだ。何見てるの？」
凪が返事をした直後、声がまた降ってくる。同じく演劇部の七瀬晴奈だ。
「次の脚本の資料」
どういった道具が必要か。必要な材料は何か。どういう音響を入れれば効果的か。
まだ完全な脚本ではないので照明や音響については未確定要素だが、道具についてはかなり詳細に書き込んでくれているので考えることが少なくない。
凪は、この演劇部で役者を務めている七瀬たちや、青原ほど演技そのものに情熱を燃やすことはないし、知識もない。だけど、演劇が好きだ、という気持ちに差はない、と凪は思っている。光や音、使えるすべてを使って、視覚的にも聴覚的にも、劇を色鮮やかにしていく。観客の全身を劇に引き込んでやる、と思いながら。脚本を読んで演技を見て、脳を駆け巡るイメージを形にしたくてたまらなくて、幼い子供のようにわくわくする。
「珍しい。まだ脚本完成してないんだ。……あ、そっか。体調崩してたもんね」
「……うん、まあ、それもある」
七瀬の言葉に、珍しく青原の歯切れが悪かった。
その様子に疑問を覚えて詳しく聞こうとしたところ、また別の足音が聞こえてきた。
「飛輪に千景。なんだ、言えば早く来れるじゃん」
と青原の声。顔を上げると、二人の男子生徒がこちらにやってきて、鞄を床に置くところだった。
「梨沙が超重要連絡なんて勿体ぶった言い方するからだろ」
その青原の言葉をバッサリいったのは田中飛輪である。
「ところで梨沙さん、その超重要連絡って？」
一緒にきたもう一人、千明千景が、開口一番、この場にいる青原を除く誰もが聞きたかったことを聞いた。凪も思わず、視線を上げた。
「あー……もうちょっと待って」
千明の質問にもまた歯切れ悪く答えた青原は、しきりに教室の外を気にしているように見えた。
タブレットの時計を見ると、十六時ぴったり。
「ってか海斗は？」
最後の一人、三浦海斗がまだ来ていない。彼は元来あまりやる気がなかったが、夏ごろ、青原にカンカンに叱られて以来心を入れ替え真面目になったと凪は思っていた。が、どうやら青原的には完全には信用しきれていないらしく、少し苛立っているようだった。
青原がため息をつき、教室全体が薄く緊張感を纏い始めた、その時。
「すいません！　ギリギリになっちゃって！　っていうか何が起きている！？」
物凄い声量とハイテンションで、その三浦が教室に滑り込んできた。
おそらく走ってきたであろう勢いのままドアを閉めるから、ドアはギギギ！と甲高い音を立てた。田中が嫌そうに顔を顰めた。

「遅い！　あと重要事項については今にわかるから……」
「いやそっちもだけど、そうじゃなくて！」
三浦は青原の圧にも負けないテンションでそう言ったあと、ゼーハーと荒い呼吸を繰り返して息を整え、床に座り込んだ。
「そうじゃなくて、何？」
千明が聞いた時、さっき閉められたばかりのドアがまたぎいいい……と開いた。
もう部員は全員揃ったはずだし、名前だけの顧問はいつも終了間際にしか来ない。誰だ？　とみんなで顔を見合わせると、ドアの方から声がした。
「ここが演劇部の部室ですか」
「ほえ！」
つんと澄ました声に、千明が驚いた声を出す。澄ました声にどこか聞き覚えがある気がして、その声の方に視線を移す。
細いフレームの眼鏡をかけた、背の高い女子生徒だった。上履きの色からして三年生だろう。
「せ、生徒会長！？」
千明が素っ頓狂な声を出す。その女子生徒は静かに頷いた。凪はああ、だから聞き覚えがあったのか、と思いながらなんとなく青原の方を見た。他の面々が驚いたり、ピンときていない顔をしている中、彼女は一人唇を噛み締め、険しい顔をして俯いていた。
「だから、さっきからそうやって言ってるってば。俺の案内、そんなに信じられないっすか！」
三浦がその女子生徒、もとい生徒会長に返事をした。
「三浦くん、どういうこと？」
七瀬が困惑を表情に浮かべながら、三浦に問いかける。
説明によると、ここに来るまでの途中でこの生徒会長に声をかけられ、部室までの案内を頼まれたという。そこでこの地下教室まで連れて行ったが、生徒会長はまさかこんなところ(確かに空調もドアの建て付けも悪いので、ぐうの音も出ない)で活動しているとは思わなかったらしい。つまらない冗談だと思われ、三浦は信じてもらうために先に自分が部室に行き、青原に会長への説明を頼もうとした、ということだった。
「俺冗談言ってないっすよー」
三浦はそう力なく呟いて、水筒の水を勢いよく飲み始めた。なんと声をかけていいかわからず、押し黙る部員一同。
静かに会長がこちらへ歩いて来る。
「それで、何の用なんですか？」
沈黙を破ったのは青原だった。生徒会長の方を向いて、威嚇するように語気を強めた。
「演劇部の部員全員に伝えなくちゃいけないことがある、あなたがそう言ったから私たち、今ここにいるんですけど」
どうやら青原も『超重要連絡』と言っておきながら、その中身は生徒会長が来る、ということくらいしか知らなかったらしい。まあ、こんな弱小部に生徒会長が来る時点でかなりの重大事件だ、という考えについては凪も賛成せざるを得なかった。
しかし、青原の威嚇(それも、凪たちがされたら確実に震え上がる)を受けた生徒会長は、きっと青原を睨みつけた。
その視線は青原だけに向けられているはずなのに、凪を含め他の部員は全員ぶるりと身震いし、姿勢を正した。
青原も怯んだのか不信感一色だった目に、不安の色が入ったように見えた。
「端的に説明すると、今年度でこの演劇部は廃部することが決定しました」

怯える部員、ひいてはこの部活もどうでもいいと言わんばかりの声色で会長は言った。
……は？
全員があっけに取られ、何も言えなかった。
凪の脳みそは言葉の意味を理解することを拒否していた。
「ちょっと待ってください、急にそんなこと言われても納得できません！」
真っ先に反論したのはやはり青原だった。
「部員が五人以上いれば部として認められるというのが校則ですよね？　部員は六人、規定はちゃんと満たしています。それに、停部になるようなこともしてません！」
会長はそんな青原に一度目をやり、すぐにそらした。
「先日行われた生徒会での会議で、来年度に向けて予算削減を推進していくことが決まり、実績のない部は廃部になることが決まりました」
「そんなのあんまりです！」
青原が悲痛に叫ぶ。
七瀬は今にも泣きそうな顔をしていた。どうして……と力無く呟いた言葉が、地面に落ちていく。
三浦の手が震えている。拳を作って隠そうとしているけど、全然うまくいってない。
「あの、ぼくたち、本当に頑張ってるんです。嘘じゃないんです。本当はずっとがいいけど、せめて、あと一年だけでも。どうにかなりませんか！」
千明も言葉を重ねる。
田中がそんな千明の言葉に深く、深く頷いた。
そんな部員たちを見て、会長は一つ、ため息をついた。
「……六月に行われる文化祭の、動員数ランキングというのは知っていますか」
各々が恐る恐る、頷く。
文化祭では食品の販売や展示など、いろいろなジャンルの出し物がある。そのジャンルごとに訪れた人の数をカウントし、部門ごとに人数がいちばん多かったクラスを優勝にする、というものだ。
「一応、そこでの体育館ステージで動員数一位を取れば存続が認められる、という決まりにはなっています」
一位。
それは、現実的に考えれば高い壁だった。例年、部員の友人や家族などはきてくれるが、吹奏楽部や軽音部、ダンス部などには敵わず、話題を掻っ攫われているのだ。
だけど、青原の書く脚本が。舞台裏から見る、輝く役者たちの姿が。
「……やれる、と思います」
気づけば、凪は言っていた。
こんなところで終わってしまうのは、あまりに勿体無い。
青原は大きく目を見開いてこちらを見た。一度瞬きをしたと思ったら、満面の笑みになる。
「当たり前じゃん！　やれるに決まってるでしょう。やらせてください」
きっと生徒会がこの条件を出したのは、この弱小演劇部にやれるわけがないと踏んでいるからだ。凪はそう思っていた。おそらく、青原や他の部員もそうだろう。何もせずに終わってしまうのも可哀想だから、なんてきっと思われているのだろう。それは、目の前の生徒会長を見ても明らかだった。

これは、演劇部から生徒会への宣戦布告だ。
凪は、持ったままの電子ペンを強く握りしめなおした。